
メイドスマイル

梶子朱子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイドスマイル

【Nコード】

N4564E

【作者名】

梶子朱子

【あらすじ】

待ちに待った文化祭。可愛い彼女と一緒に周っていたはずなのに・
・俺の人生って・・・・？

今日は、待ちに待った楽しい文化祭。

特に役割を持っていなかった俺は、可愛い彼女と一緒に校内フラフラしている。

ここが男子校なものだから、周りの奴らに冷やかされたり、ブーイングをくらったりした。

それでも、幸せなものには変わりはない。

「なあ、いずみ。どこ行きたい？」

「うーん・・・私、少しお腹すいたから・・・」

「了解。んで、どこにするかな」

文化祭のパンフレットを広げて、軽く何かを食べられそうな所を探してみる。

もちろん、いずみも一緒に。

「あっ、ここがいいな」

小さな手で目当てのクラスを紹介の欄を指しながら言う。

「メイドカフェ？」

「面白そうでしょ？」

確かに、インパクトはある。

メイドっていっても、どうせむさ苦しい男ばかりかだぜ？

ハッキリ言って、そんないかがわしい所に彼女を連れて行きたくない。

「ねえ、ダメ？」

身長差があるため、自然と上目遣いになる。

駄目だと言ってしまうば、きっと俺の意見を聞いてくれるだろう。

「・・・いいよ」

後悔するだろうと思ったが、そんな考えを頭の隅に寄せた。

結局、彼女の意見を了承してしまった。

だって、さ。

喜ぶ顔を見たかったから。

「やった！」

ほら、笑った。

彼女の笑顔を見てみると、他の事がどうでも良くなってきたしまった。



人混みを上手く避けながら、メイドカフェ、三年二組の教室へ辿り着いた。

「ふう、やっとついたね」

「だな」

ドアを開けるとそこは

「お帰りなさいませ！ご主人様、お嬢様」
地獄だった。

「やめとく？」

俺が、この光景に引いた事に気が付いたようだ。

「まあまあ、そんな事言わないで下さいよう」

そう言っただけで無理やり部屋の奥へと連れて行かれてしまった。

「はい、こちらがメニューになります」

「ありがとうございます」

「決まりましたら、お呼びくださいね」

「どれにする？俺、カツサンドにするけど」

「うーん・・・何でもありって感じだから迷うなあ」

「おすすめはオムライスです♪」

ヒョッコツと出てきた奴が言った。

「お兄ちゃん！！」

実は、彼女の兄貴だったりする。

そして、俺の部活の先輩。

ここのクラスの事をすっかり忘れていた・・・

「よう！楽しんでるか？」

「うん、ふみ君が案内してくれるから」

「へえー、そうか。よかったなあ、いずみ」

笑った顔がいずみと似ているもんだから、一瞬、メイド服姿の先輩にドキッとしてしまった。

きつと、一生の不覚になるんだろう。

「でよ、史弥^{ふみや}」

「はい？」

「この俺様が忙しく客の相手をしているってのに、可愛い妹をたぶらかして遊んでいたわけか」

「たぶらかしたって、そんなわけないじゃないですか」

「ほう、たぶらかしたのか」

「ちよっ、誰もそんな事・・・」

がつしりと両腕を掴まれた。

物凄い、嫌な予感がする。

「お前、俺らの助っ人やれ」

「はあ？」

「まあ、いい。とりあえず昼飯^{ひるめし}を食え。俺の奢りだ」

そう言って立ち上がり、暖簾^{のれん}の中へと入っていき、しばらくしてオムライスを二つ持って出てきた。

「あっ、ケチャップがハートになってる！」

「お嬢様への愛を込めてみました♪」

「で・・・俺の、は・・・」

思いつきり、ハートにひびが入っていた。

「それもご主人様への愛ですわ♪」

高らかに笑う彼が、とても恐ろしい・・・

「さあ、どうぞごゆっくりー」

「いただきます」

「・・・きます」

大きく一口。

「あっ」

意外においしい。

それが一番に出てきた感想だった。

いずみのやつを覗いてみたが、綺麗にハートが残っていた。俺のケチャップは、潰してしまつて、もう何だかわからない。

「うーん、おいしい」

祝福の笑みを浮かべて、一口一口を食べていくいずみ。

あんな人から、何でこんな可愛らしい妹ができるのだろう・・・

「ふみ君、美味しいね」

「ああ、思った以上で吃驚した」

穏やかに時間が流れてゆく。

でも、そうは続きそうにない。

俺は、確実に俺は何かに巻き込まれる。

憂鬱――

先輩は何を企んでいるのか・・・俺はきっと・・・考えたただけでもゾツとする。



「うう、苦しい」

「大丈夫か？」

「ヘーキだよ」

「お皿をおさげしますね」

「動けるか？」

いずみには悪いけど、捕まる前にさっさとここを出たい。

「大丈夫だよ」

「よし、じゃあ行くか」

「どこーにー？」

またもや、両側から腕を掴まれた。

「助っ人をやれ、って言ったよな？」

「確かに言っていましたけど、やるとは言っていない
「そうだよね」

「まあまあ、俺の話を聞け」

そのまま椅子に座らされてしまった。

「ご覧の通り、ここは人数が不足している」

沢山の人がいるわりには、接客している人は少なかった。

「そこでだ、俺はお前に」

「絶対に嫌です」

やっぱり予想通りだった。

「良いじゃねーかよ」

「嫌です」

「我儘な奴め!!」

「我儘なのはどっちですか!」

言い返すと、あからさまに舌打ちをされた。

そうして標的を変えたようだ。

「なあ、いずみ。お兄ちゃんのお願いを聞いてくれ」

「うん? なあに?」

「ストップ!!」

二人の間に割って入る。

「なんだよ、邪魔すんな」

「あんた、自分の妹にそんな事をさせる気ですか!？」

「あんた、だど?」

「いや・・・その、あつ・・・すいません」

「わかればよろしい。んでよ、いずみ」

「ちよつと、何でいずみなんですか!」

ただでさえ、男の比率が多いというのに。

「だったらお前がやるか?」

「それは・・・」

「だから、いずみに頼むしか」

「汚いですよ?」

「汚かろうが、汚くなかろうが、俺は人手が欲しいんだよ」
「もう！さっきから何なの？」
一人取り残されていたいずみは、少し拗ねていた。
「ごめんな？この馬鹿がハッキリしないから」
「・・・やりますよ、やってやりますよ！」
「よし、言ったな！じゃあ、さっそく・・・」
「ちよっ、放してくださいよ！！」
「いずみ！面白いもん見れるから、ちゃんと待ってけよ！！」
「う、うん。」



「きゃー！史子可愛いわよ」
「嬉しくないです」
「わぁー・・・」
「いずみ、頼むから見ないで・・・」
「大丈夫だよ、私的には」
「えっ・・・？」

予想はしていたけれど、もうその域を超えている。
そして、自分自身が情けない。

好きな奴の目の前で女装なんてさ。しかも、メイド服。

「さあ、助っ人よ、頑張りたまえ。メイドは笑顔が基本だからな」

「はぁー・・・」

「笑えって言ってるんだろ」

「ああー、はいはい」

この姿で接客しろと？

「行け！」

背中を蹴られ、泣く泣く出て行くと、思ったとおり視線が集まった。
いずみはというと、裏で先輩の手伝いをする事になった。股がス
ースーして気持ち悪い。

肩がきつい。

もう、嫌なことばっか。

「悪いな、アイツが……」

別の先輩が、優しく話しかけてくれた。

「ああー、何かもう諦めたんで」

「はは、そうか。あっ、客が来たぞ」

「……行ってきます」

ドアが最後まで開ききったら……今だ！

「おっ、お帰りなさいませ、ご主人様！！」

恥ずかしい、今すぐこの世から消えてしまいたい。

さっさと注文を聞いて、奥へと逃げるように戻っていった。

「史子、まだまだだねえ」

「先輩……」

「大丈夫？」

「……じゃない」

「でっでも、慣れれば大丈夫だよ！ねっ、お兄ちゃん！！」

「おう、お前だったら、no. 1だって狙えるぞ！」

慣れたくないし！no. 1なんてなりたくないし！！

「ほれ、客が来たぞ。行ってこい！」

「うわああ」



ようやく長い一日が終わった。

どれだけの人を、あの格好で相手したんだろ、俺。

ただ一つだけ言える事がある。慣れる事だけは無かった。

「いやー。史弥、マジで助かったぜ」

「良かったですね」

「いやいや、本当に感謝してんだって」

「はあー」

せっかく、いずみとゆつくり過ごせると思ったのにな。

「ふみ君・・・」

ああー、何でメイドカフェなんて行ったんだろ。

「ねえ、お兄ちゃん」

「何だ？」

「今日、少しだけ帰るの、遅くなつて」

「はあ？」

「ほら、ふみ君とあんまり話せなかったから・・・ダメ？」

「うーん・・・わかった。許す」

「ありがとう」



「ごめんね？」

「いや、俺の方こそ。放置してたし」

「でも、私はたのしかったよ？」

「うーん。俺も、かな」

目が合った。

そしたら次第に、なぜか可笑しくなつてきて、二人で笑った。
最悪だ、なんて思いながらも、ちゃんと楽しんでいたんだ。

メイド服は、マジで勘弁してほしいけど。

「ふみ君」

「うん？」

「メイド服、似合ってたね」

「えっ・・・」

「えへへ」

「あはは・・・」

「またやってね」

「ええ!!」

「クス。冗談だよ」

いずみの笑った顔が
先輩に見えたのは

きつと、俺の・・・

いや、絶対に気のせいだろう
・・・と願いたい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4564e/>

メイドスマイル

2010年12月28日15時14分発行